

おばあちゃんと私が紡いできた記憶

(『むくげ通信』330号、2025.5.25より) **坂本知壽子**

●おばあちゃんたちの日常

韓国にある「ナスムの家」は元日本軍「慰安婦」生存女性たちの共同生活の場である。糺余曲折を経て1998年に私は外国人として初めて彼女たちと寝食を共にするイソーローとなった。彼女たちは私にとって愛する「おばあちゃん」となった。

おばあちゃんたちと過ごした時間を今でもふと想い出す。一緒に畑仕事をしたこと、キムチを作ったこと、歌ったこと、踊ったこと、笑ったこと、泣いたこと、などなど。

夕立に濡れないように私の洗濯物を取り込んでおいてくれたこと、私のベッドの上に手縫いの枕カバーをつけた枕を置いておいてくれたこと、寝ている私にそっと布団をかけてくれたこと、などなど。

死ぬのが怖いと真夜中に電話してきたこと、毎朝自分が生きて起きることができるように早朝に電話して欲しいと頼まれたこと、そして私がそれを数か月も続けたこと、などなど。

おばあちゃんのズボンのファスナーが開いていて中からブラウスがはみ出していた時、「日本兵たちはこんな風にして待ってたね」とそのブラウスをしごく素振りを見せたこと、一緒に寝ていて突然大声を出し「この娘は連れて行くな」と私をかばいながら悪夢にうなされていたこと、などなど。

●李玉善おばあちゃんとの出会い

イソーローを終えた後も、「ナスムの家」にはたびたび遊びに行っていた。新たに入居されたおばあちゃんたちとも仲良くなかった。その中に李玉善(イ・オクソン)おばあちゃんがいる。

李玉善おばあちゃんは長年帰国できなかった生存女性の一人である。娘が戻らないため家族は、死亡届を出していた。彼女の国籍を回復するためにはまず戸籍から回復させなければならなかった。苦労の末、やっと国籍が回復したのもつかの間、2003年、戦後処理が遅々として進まない韓国政府への抗議として、韓国の国籍を放棄すると宣言した。韓国政府はこれを受け入れなかつたが。

本稿では紙幅の関係上、彼女の「公式的なプロフィール」を改めて記載することは控え、「私的な関係」の中で紡ぎ出してきた私の中の李玉善おばあちゃんの記憶をいくつか想起してみたい。

●博物館展示のような李玉善おばあちゃんの部屋

イソーローを解消した後は、もう私の部屋はない。そのため李玉善おばあちゃんのお部屋で寝たりもしていた。李玉善おばあちゃんが「ナスムの

家」に入居し始めた当時は、荷物も少なかった。次第に荷物も増え、壁には写真が貼られていった。

古くから住んでいるおばあちゃんたちが証言をしているのを見ながら、李玉善おばあちゃんも少しずつ証言を始めた。おばあちゃんたちが一人、また一人と私たちのそばを離れると、李玉善おばあちゃんは積極的に証言活動を行った。残された者の責任を感じているかのようだった。

李玉善おばあちゃんは、日本はもちろんのこと、世界各国を訪れていたので、彼女を知る人も多い。人々と積極的に交流し、インタビューにも応じ、写真もたくさん撮った。いつしか李玉善おばあちゃんのお部屋の壁は、たくさんの写真で埋めつくされ、まるで博物館の展示のようだった。一枚一枚の思い出を眺めるのが、李玉善おばあちゃんの日常となっていたようだった。部屋に遊びに行くと、いつも写真の説明が始まる。相槌を打つとさらに話は膨らみ、箇箇の引き出しからアルバムを出してきて、一冊ずつ説明しながら見せてくれる。その姿は、誇らしげでもあった。人々との交流を通して、自己尊重(self-esteem)とエンパワーメントのプロセスを彼女が経ていたのだとしたら、証言活動が持つ意味とは、多様で多層であると言ってもよいのではなかろうか。

●李玉善おばあちゃんが使う「ことば」

李玉善おばあちゃんは、日本の植民地時代に朝鮮を離れ、中国の「慰安所」に連れて行かれた。置き去りのままだった彼女が、再び韓国に戻ったのは、58年後だった。

言語は時の流れの中で変化する生き物である。韓国語がネイティブではない私だけれど、李玉善おばあちゃんが使う「ことば」には、いくつかの特徴があることを感じ取っていた。

李玉善おばあちゃんの「ことば」は、植民地朝鮮時代に使っていたものなのか、中国で朝鮮族の人たちと話してきたものなのか、私にはわからない。そんな私でも気づいたことは、韓国で人生を送ってきたおばあちゃんたちと、李玉善おばあちゃんが使う「ことば」や表現が、少し違うということだった。長年、韓国に戻れなかった元「慰安婦」生存女性たちに見られる特徴の一つでもある。

そんなこともあって、李玉善おばあちゃんの独特的「ことば」は、当初私には難しかった。知らない単語というよりは、耳慣れない表現だったからである。次第に李玉善おばあちゃんの「ことば」のパターンがつかめると、むしろ李玉善おばあちゃんらしさを感じたものだった。

●李玉善おばあちゃんが漢字帳を欲しがった理由

「漢字帳を買って来てほしい」。ある日、李玉善おばあちゃんから買い物を頼まれた。58年間も漢字の国、中国で過ごしてきたのに、今さら漢字の勉強だなんてと思い、理由を尋ねてみた。

「日本人の人たちと話すとき、通訳を通して、私の話がきちんと伝わっているのかわからない。だから直接、日本語で話したいんだよ。文法はわかるから、漢字を勉強すれば、上手に話せるようになるんじゃないかと思って」。

これもまた、実は李玉善おばあちゃんだけではない。今まで私は何人かの元日本軍「慰安婦」生存女性のおばあちゃんたちから「日本語を教えて欲しい」と頼まれ、実際に教えていたこともある。

日本の中に「慰安婦」問題を理解しない人がいるのは、言語の違いのせいではなく、日本軍の加害を認めたくないせいである。学校に行かず「学校に行かせてやる」という言葉に騙されて日本軍「慰安所」に連れていかれてしまった彼女たちが、自分の被害を伝えるために、自分の言葉ではなく、相手の言葉で話そうと「日本語を勉強したい」と言わなければならぬ現状にやりきれなくなる。

「日本語を、おばあちゃんが勉強する必要なんてないですよ」と言いそうになって、言葉を飲み込む。私ができることは、思う存分、自分が話したいことを話せるようにお手伝いすること。実際のところ「勉強する」という経験がない彼女たちは、勉強の仕方もわからない。私との日本語レッスンもさほど長くは続かない。それでも、彼女たちが書いた文字に大きくハナマルを書いたり、100点と書いたりして、学校に行けなかった彼女たちに、学校の雰囲気を味わってもらえるよう、私なりに工夫をしたものだった。

フィリピン人の元日本軍「慰安婦」被害女性たちと出会うためにしばし拠点をフィリピンに移す計画を立てた私は、漢字帳を持って水曜デモに行き、李玉善おばあちゃんに渡して、韓国を離れた。

●フィリピンでの再会と別れ

国立フィリピン大学女性学研究所の客員研究員としてフィリピンに滞在中、日本の戦争・戦後責任問題に関する国際会議があり李玉善おばあちゃんが証言者として来比した。見知らぬ国フィリピンで緊張していた李玉善おばあちゃんは私の顔を見るなり「なぜここにいるの?」と喜んでくれた。

会議中、緊張のせいか李玉善おばあちゃんは体調を崩したことがあった。一緒にトイレに入り、お腹をさするけれど、李玉善おばあちゃんは苦しむばかりだった。参加者の中に医療に携わる日本人女性がいたことを思い出し、彼女に助けを求めた。李玉善おばあちゃんの状況を見て、彼女は愛

情溢れる処置方法を提案してくれた。李玉善おばあちゃんは「申し訳ないから」と何度も断った。緊急性を察知した彼女と私が説得し、彼女に処置をお願いすることになった。彼女の見立て通りの処置のお陰で、李玉善おばあちゃんは楽になった。このことはその後、何年も何年も、「あの時は本当にありがとう」と礼を言われることになる。

会議が終わり、別れを惜しみ、いざ空港に向けてタクシーが出発しかけた時、「いつ韓国に戻るの?」と李玉善おばあちゃんが聞く。「来年。それまで元気でね」と答えて私はドアを閉めた。久しぶりに再会できたのに、また会えなくなると思うと、悲しみが込み上げてきて私は泣いてしまった。すると閉めたドアがまた開き「フィリピンで頑張りなさいね」と急いで私に韓国のお金を握らせて、李玉善おばあちゃんを乗せたタクシーは去っていった。見送った後、手の中のお金を数えてみると、10万ウォンもあった。マニラで楽しい思い出を作るために準備したものだったに違いない。余韻の中で、さらにしばらく涙は溢れ続けた。

●心の中で、永遠に生き続けるおばあちゃんたち

フィリピンの元日本軍「慰安婦」生存女性のおばあちゃんたちからもらった多くの語りと愛情と宿題を胸に、1年半のフィリピン滞在を終え、韓国に戻った。留学仲間たちは次々と日本に帰国していく。私も日本に帰国するタイミングについて考えた。それまでの私は元日本軍「慰安婦」のおばあちゃんたちが亡くなると、最後までできる限りの弔いの時間を過ごしてきた。お通夜はもちろん、旅立ちを見送るさまざまな儀式を行うことでおばあちゃんたちへの申し訳なさと感謝の気持ちを最後に伝えたかったからである。すべてのおばあちゃんたちはいえないまでも「ナヌムの家」のイソーロー時代にともに過ごしたおばあちゃんたちの最期を見送るまでは韓国を離れない、と私は決めていた。そして数年前、日本に帰国した。

帰国後も一人、また一人と、元日本軍「慰安婦」被害女性の訃報がニュースで流れる。今すぐお別れに駆けつけたいけれど、日本の日常生活の中でただ一人、静かに弔うばかりだった。

数日前から、ふと李玉善おばあちゃんが気になり、いろいろ思い出していた。そんな矢先だった。2025年5月11日、訃報が流れる。私は今この瞬間もひたすら深い哀しみの底に沈んだままである。李玉善おばあちゃんのご冥福をお祈りいたします。

本稿は、書いている私と、読んでくださる読者の皆様にとって、李玉善おばあちゃんを追悼し、日本軍「慰安婦」問題や被害女性について考える時間になることを切に願いながら執筆した。合掌。